

森林獣類による被害調査と個体数センサス法の確立

平成15年度～17年度（国補システム）

佐野 明

ニホンザルによる農林業被害が県内各地で深刻化しており、地域によっては重大な社会問題となっている。このため、三重県では地域住民が効率的な追い払いを行なえるよう、ラジオテレメトリーを利用して、群れの接近をいち早く探知し、その情報を共有するシステムの整備を行った。さらに、簡便で安価な侵入防止柵を試作し、効果判定のための現地試験を行った。

1. 群れ接近早期探知システムの整備

「上野B群」は三重県上野市東部、阿山郡大山田村西部および名賀郡青山町北部一帯を遊動域とする群れで、三重県環境部(当時) によって成獣メス1頭に電波発信機が装着されている。平成15年度までの調査で、この群れは農地周辺の林内をねぐら(夜間の泊まり場)とすることが多く、日出直後にねぐらに近い農地に出没して加害する傾向があることがわかった。すなわち夜間に電波受信を行うことによって、最も無防備になりやすい早朝に加害される農地の予測ができることが示唆された。

そこで2004年6月、群れが頻繁に出没する4地区に基地アンテナを設置し、住民自らが夜間に受信を行い、地区内の連絡用スピーカーを使って群れの位置情報を共有するシステムを整備した。しかし、10月に電波発信機が脱落したため受信不能となり、システムの円滑な運用まで至らなかった。

2. 低コスト被害回避法の検討

漁網(ナイロン製刺し網)と農業用資材(グラスファイバー製ポール)を組み合わせた簡易猿害防止柵を試作し、南牟婁郡紀和町内の農地に設置した(図-1a)。材料費は約1100円/mであった。支柱にはグラスファイバー製ポールを用い、「ぐにゃりと曲がって登りにくい」構造になっている。しかし、それではサルが網を引っ張った場合に、群れの中の他個体が乗り越えて侵入しやすいため、支柱を2本にして庇(ひさし)を設け、網が引っ張られると、その部分が「立ち上がってくる」よう工夫した(図-1b)。また、網の「すそ」を1mほど地面に垂らし、その上に水田用の防草シートを敷いて金具で固定することで、網の下からの潜り込みを防ぐとともに、草刈りの省力化を可能にした(図-1c)。2005年3月末現在で、周辺農地への加害はあったものの、柵の上を超えての侵入、下からの潜り込みともなかった。



図-1. 現地適応試験に供試した簡易猿害防止柵

a, 簡易猿害防止柵の構造; b, 庇部分; c, 防草シートによる潜り込みの防止.